

語る〈女〉と語られる〈女たち〉

——永井荷風『つゆのあとさき』における語り論

金 田 み か

永井荷風「つゆのあとさき」は、一九三一年十月に『中央公論』第四十六年第十号の「創作」欄に発表された作品である。『中央公論』での発表時には「×」印で伏せられた部分が多く、同年十一月に中央公論社から『つゆのあとさき』として発行された際には伏字もある程度埋められたが、新たに伏字となった表現も多い。この作品は作者の生涯の中では後期に位置づけられる作品であり、荷風作品の特徴とも言える「女給」を主人公としている。作者の永井荷風は、大正末頃から銀座の「カッフェー」に頻繁に通っていた記録が残されており、荷風の実生活での「好色ぶり」は非常に有名である。

本稿では、今日までの先行研究で「他の女給とは異なる

女給」だと指摘され続けてきた主人公・君江の読解を中心に、軽視されがちであった鶴子が、君江と対照的な女性として描写されたわけではないことを発見し、従来の『つゆのあとさき』研究とは異なる視座での作品読解を目指した。その中で、筆者は先行論文において散見された「永井荷風は女性に対して侮蔑的な作家であった」という旧来の作家像には疑問を抱いた。

荷風作品の題材となってきた「娼婦」、性を売る女性について、〈型〉が存在することが指摘されている。荷風作品において娼婦たちは、男性から一方的に搾取される存在であり、結果として「永井荷風は女性に対して侮蔑的」「女性蔑視作家」といった作家像が今日に至るまで形成されてき

たのである。荷風作品を読み解くにあたつて、この娼婦たちの存在が重要であることは筆者も異論がないが、『つゆのあとさき』の君江は、女給でありながら従来の〈型〉から逸脱した存在であり、鶴子は不倫歴がある上、清岡に対して敬愛の念を一切抱かず、いわゆる「良妻賢母」型の女性というわけでもない。彼女たちのような女性をも作品のモチーフとした荷風は、本当に女性に対して侮蔑的な作家であつたのか。これらの先行研究に対する疑問を解決に導く一助とすることを目的とし、筆者は本稿を執筆する次第である。

『つゆのあとさき』における先行研究では、谷崎潤一郎が一九五六年に『文藝』に寄稿した「『つゆのあとさき』を読む」が最も著名であり、この谷崎の評を引用した考察も多い。両者については、谷崎の『刺青』を荷風が絶賛したことから親交が生まれたとされるが、発表当時、否定的に受け止められた『つゆのあとさき』を谷崎が称賛するなど、師弟のような関係を築いたとする指摘も存在する²。そのため、両者を比較しようとする先行研究も多く見られた。その中で宮城達郎は、両者が生育された家庭環境、特に母親に着目しつつ

荷風と谷崎が対蹠的と言つてよいうらはらな女性観を抱いていることは注目する必要がある。荷風は女性に対してまったく侮蔑的であり、谷崎はまた徹底したフェミニストである³。

と述べた。同じ東京出身といえども、小石川区の生まれで、「山ノ手」の中で育つた荷風と、下町の日本橋で育つた谷崎とは、その生育環境には大きな差があつただろう。また、衆議院議員や外交官などを多数輩出した名家での幼年期の生活や母の存在が、荷風の女性観に直接作用したとするならば、荷風の女性観は、昔ながらの「武家の女」となつたはずだ。当然、荷風が作品のモチーフとした「娼婦」とはかけ離れており、荷風の女性像は、家庭の中だけで醸成されたものではないだろう。また、荷風と谷崎が対蹠的であるがため、荷風が女性に侮蔑的であるというのは短絡的である。従つて、この宮城の論に筆者は同意しかねる。

荷風が女性に対して侮蔑的である、とした別の論では奥野信太郎の

荷風はしばしば放蕩無頼ということばをもつて自らを評している。(中略) いかなる女人愛好の場においても、つねに自ら高所に立つて女を安易に扱つてゐる。娼婦もしくは娼婦に準ずる女性との交渉に終始してい

るのも、こうした女が一種の氣安さを感じさせてくれるからである。⁴

という言葉説が存在する。奥野は、荷風の「好色趣味が作品を支えている重要な柱の一本」であるとし、荷風が娼婦以外の女性に無関心であったと述べた。しかし、客として女性の「性」を買っていた荷風は、女性を安易に扱っていたのか。ただ安易に扱うのなら、結婚して女性を家庭に入れたしまった方が良く、実際に荷風には複数の婚姻歴がある。それにも関わらず、買う必要のある娼婦たちを相手とした荷風が、「女を安易に扱」ったとは考えられない。女性を家庭に入れることなど容易だったはずの荷風が、家庭の外にいる女性と関係を持ち続けたという事実だけでも、「永井荷風＝女性侮蔑作家」という通説には疑問が生じてくる。

岩波書店出版の文庫版において解説を執筆した中村真一郎は

生涯の大部分を独身で過した荷風は、日本人離れた西欧的合理主義から、定期的な性的欲求を満すためにだけ、常に一定の女性と契約を結んでいた。(中略)

性的交渉をする相手は、絶対に玄人に限り、素人の女性には手をつけない。つまり、女性は金で買うべき

であって、同じ階級の女性と対等の恋愛をすることは、罪悪であるという、今日のモラルとは正反對の倫理感⁵。

を抱いていたと指摘した。この中村の論からは、「玄人」の女性とのみ関係を持った荷風は、女性に「まったく侮蔑的」なのかという疑問が起こる。繰り返しになるが、荷風には婚姻や内縁期間など、金銭を介さずに女性の「性」を手に入れられる期間が長かった。その上で、買わなければならない女性たちとの関係を続けた姿勢からは、「客」としての立場を弁え、金銭という報酬を授与する形で娼婦たちを尊重していたと思えてならない。

一方で、「同じ階級の女性と対等の恋愛」をしてはならないという倫理観については、荷風がそのような女性と関係を持たなかった事実からも概ね同意である。ただし、同じ階級ではない女性との婚姻期間中も、荷風の視線は常に家庭の外の娼婦の女性に注がれていた。つまり、荷風にとっては、家庭の外にいる女性であることも必要だったのではないか。これらの荷風が女性に対して求めた条件は、当時の価値基準とはかけ離れた、かなり特異なものである。同時に、一人の男に操を立てることが美德とされた時代、その枠から逸脱する女性たちを描き続けた荷風は、女性を

「侮蔑」したというより、「尊重」していたのではないかと
思えてくる。

小野祥子の指摘にあるように、荷風が描く女性はその殆どが娼婦である。小説内には、多くの娼婦が登場している。しかし、鶴子は「良家の子女」で、理想的な貞操観を持つ女性として描かれるが、清岡を残して洋行する。荷風が描いた女性の中で、鶴子の存在は異彩を放っているが、直接登場する場面が二カ所のみであるためか、鶴子への言及は従来の研究では殆ど見られなかった。また、菅聡子、多田蔵人、戸松泉らが述べたように、その娼婦（型）から逸脱した君江もまた異質の存在である。そのため、筆者は君江と鶴子に着目し、『つゆのあとさき』を考察することが妥当であると考え次第である。

一 君江が語る君江

君江はこの年月随分みだらな生活はして来たものゝ、しかしそれほど人から怨を受けるやうな悪いことをした覚えは、どう考えて見てもない。（本文八十一頁）
結局、貸間の代と髪結銭さへあれば、強いて男から金など貰ふ必要がない。金などはもらはずに、随分男の

いふままになつてやつた事もあるほどなので、君江は今までいかにほど淫恣な生活をして来ても、人から左程怨を受けるやうな筈はないと思ひ込んでゐる。（本文八十五頁）

「君江さん。あんた、何ともない事。そんなもの見て。わたしなら破ひてしまいたくなるわ。」と写真の上に南京豆を打ちつけたのは、もと齒医者^{ハシヤ}の妻で生活難から女給になつた鉄子である。

「あなた。随分焼餅やきねえ。」と君江は却つて驚いたやうに鉄子の顔を見返して、「いゝじゃないの。奥様なら奥様で。気にしないで。」（本文九十七頁）

これらの記述から、君江は「淫恣」な生活を送つてきたことを自覚しているが、それを後ろめたく感じる様子は一切なく、他者から「怨」を受けるやうなことは何一つないと考えている。また、その「淫恣」な生活を送る理由は好奇心からであり、関係を持った男性たちには取り立てて興味を示さない。彼女の女給として気ままに生きるポリシーが読み取れる。

また、君江の恋愛観について、彼女は「生れついで^{ナマタマ}の浮気者」であり、「今以つて小説などで見るやうな恋愛」をし

たことがない。そのため、嫉妬を抱くこともないのである。草間八十雄は女給の職業と私生活について「常に性的の對象となり幾多の男性に笑ひを賣る女、其反動として濃厚なる戀愛に陥るのは當然である。」¹⁰と述べている。「濃厚なる戀愛」に陥りやすい点は君江も同様だが、君江の戀愛感情が長期間同一人物に向けられることはない。また、自分が「浮気者」であるという自覚があるにも関わらず、その事実が他人から「怨」を買っていると思ひ至らない君江は、女給という客商売に従事していながら、周囲の人物へ向ける関心が薄い。これは客だけでなく、かつて同じ店で働いていた同性の松子に対しても同様である。

しかし、すべての他人に興味を示さないのではなく、京子の元旦那の川島や昔なじみの松崎に対しては好意的に接しており、舞踊家の木村に対しては（君江が新しい男に対して抱く興味もあるだろうが）「このまま別れるのが物足りなくてしょうがない。」とまで思っている。また、自身を女給へ誘った京子に対しても、友好的に接している。つまり、君江にとって他人とは、自身の「淫恣」な生活や性的趣向を包み隠さず、性に奔放であるという「秘密」を共有する人物たちと、性に奔放な生活を秘匿にする人物たちとに二分することができる。前者は、君江の心情の内側に入

ることを許された人物たちであり、後者は君江から心情の内側に入ることを拒まれ、その外側に位置付けられる人物たちである。川島や松崎、木村は前者であり、君江の恋人である清岡、客の矢田、君江に怪我を負わせる円タク運転手の男たちは後者である。このように、君江はすべての「男」に対して一概に興味を抱かないわけではない。

君江は肉体関係を持つ男性について、「初めて逢った男に対しては、たびたび馴染を重ねた男に對する時よいもかえって一倍の興味を覚え、思うさま男を悩殺して見なければ、気がすまなくなる。（中略）美男子に對する時よりも、醜い老人やまたは最初のやだと思った男を相手にして、こういう場合（＝性行為）に立到ると、君江はなお更烈しくいつもの癖が増長」（小カッコ内は筆者注）すると感じている。君江が容姿や年齢で男性を選ぶことはない。ただし、君江は後者の心情の内側に入ることを拒む人物たちと肉体関係を持つことも多く、また関係を持ったからといって相手を即座に前者のグループに入れるわけでもない。そのため、君江の心情の内側に入ることを許された人物、それを拒まれた人物の二つのグループの区分には、肉体関係の有無は関与しないということになる。また、「初めて逢った男」に対して、より強い興味を抱くと描写される君江の様

子から、君江の心情の内側に入ることゝ当初は許されたが、後にそれを拒まれる男性もあり、その代表例が清岡である。その逆のパターンも想定され、両者の区分の中での位置づけが変動していく男性たちの存在が認められる。君江は恋愛関係にない男性とも関係を持つてゐるため、男性の《性》に強い興味を持ったからといって即ち恋愛感情が発生するというわけではない。以上の事柄から、君江にとって、恋愛感情に結び付く相手への興味関心と性的欲求、肉体関係は互いに伴うものではないことが読み取れる。

二 男性たちが語る君江

『つゆのあとさき』内の登場人物から君江はどのように語られていたのだろうか。ここでは男性の登場人物に絞って分析する。

▽清岡

清岡は丁度その頃、一時妾にしてゐた映画女優の玲子とやらを人に奪われ、代りの女を物色していた矢先、君江が身も心も捧げ尽くしたやうな濃厚な態度に、すっかり迷い込み、どんな贅沢な生活でも望む

通りにさせてやるから、女給をやめるようにと勧めた。(本文百十七頁)

間もなく入梅があけて夏になり、土用の半からそろ／＼秋風の立ち初める頃まで、清岡は何一つ疑う所もなく、心から君江に愛されているものと思ひ込んでいた。(本文百十七頁)

清岡の君江に対する感情は大別して二つ読み取ることができる。第一に、前の妾と別れたばかりの清岡は君江の「濃厚な」態度にほだされ、「君江に愛されている」と思い込む感情である。君江が、他の女給と同じように「老人に身を寄せて平気」でゐるのは、「ひたすら生活の安定を得ようがため」と思い込み、女給の仕事を続ける理由は「カッフェーを出したいから」だと信じていた。君江に自分の「専有物」になつてほしいという欲望を抱くが、「君江に愛されている」時点の清岡は、他の客と関係を持つても、彼女の愛は自分の「専有物」だと信じ込んでいる。

しかし、君江が京子も交え、松崎と思われる老人と「遊」んでいる様子を盗み聞いた清岡は、君江に対して「いうに言われぬ憎悪の念」を抱き、「弄ぶだけ弄んで随意に捨ててしまえばそれでよいのだ」というような心持」に変化する。

る。

「君江に愛されている」時点の清岡は、君江を特殊な存在、自身に対して特別な愛情を捧げる女性だと思い込んでいるのだ。それでは清岡は、自身がパトロンとなってまで彼女を専有しようとする自分からの「愛情」と等価交換する形で君江からの「濃厚な態度」、すなわち彼女の愛情を手に入れていたと言えるのか。

この疑問に対し、筆者はマルセル・モースの「贈与論」¹¹を引用したい。モースは「招待というのは、されればお返しをしなくてはならないもの」であり、「招待というのは、しなくてはならないものであるし、されたら受けなくてはならないものである。」と述べた。この「招待」とは、物の贈与のことである。贈り物とは建前上は自発的に相手に贈られるが、実際は贈り物をされた相手は必ず受け取り、お返しをしなくてはならない、というのだ。この贈り物の概念は、『つゆのあとさき』における清岡の君江への愛情と一致している。清岡の思考では、自分の愛情を君江が受け取るのは当然であるし、自分からの「愛情」の贈与に対して、君江からも同様の贈与があつてしかるべき、というわけだ。

しかし、この清岡の「贈与」が、老人との密会という「裏

切り行為」を目撃してから憎しみ一辺倒になるかと思えばそうでもない。以降も清岡は、君江のパトロンとなり、「明日といわず即座にカッフェーなり酒場なり開業」させるかと考えている。君江からの「贈与」が失われても清岡からの贈与は続いているのだ。君江からの「贈与」が完全に消失しているかという疑問は残るものの、君江からの「贈与」に対して、清岡のそれは不均等なものに思える。裏切られても、君江に「贈与」する清岡の行動からは、自分の贈与を君江が受け取ることは必然で、また君江から贈与が返され、自分がそれを受け取ることも必然、という心理が読み取れる。つまり清岡は、君江からの贈与を再び受けようとしているのだ。

最も、清岡は君江のことを「捨ててしまえばそれでよい存在と感じており、他の女給と待合へ行ったり、芸者を身受しようとかえしている。しかし、「贈与」から君江と清岡を考察すると従来、君江と清岡との間で交換されていた愛情のバランスが崩壊することによって「怨」が生まれる、という従来の解釈とは異なる清岡の姿が見えてくる。映画女給を妾にしていた清岡ですらも縋り付くほどの「価値」が君江にはあることになる。

▽川島

川島はわづか二年見ぬ間に変れば変わるものだと思ふと、ぢっと見詰めた目をそむける暇がない。其の時にはいくら淫奔だといつてもまだ肩や腰のあたりのどこやらに生娘らしい様子が残っていたのが、今では頬から頤へかけて面長の横顔がすっかり垢抜けして、肩と頸筋とはかえつてその時分より弱々しく、しなやかに見えながら、開けた浴衣の胸から坐った腿のあたりの肉づきはあくまで豊艶になつて、全身の姿の何処といふことなく、正業の女には見られない妖冶な趣が目につくやうになつた。(中略)女の方では別に誘う気がなくても、男の心がおのずと乱れて誘い出されて来るのである。(本文百九十五頁)

川島は昔、京子を身請けしていた元旦那であり、横領罪で服役していた。君江と関係を持っていたこともあり、君江の「奔放さ」を知ってはいるが、君江が女給になつていたことは彼女から告げられるまで知らない。だが、君江から女給になつた旨や、円タクの運転手に暴行されたことを明かされても、彼女への態度は全く変わらない。『つゆのあ

とさき』は客観的な語りによって物語が進行するが、矢田の語りでは「濃艶」の一言で表現された君江の艶めかしさが、川島の眼差しを通して熱烈に書き表されている。ここで語られる君江の姿は、川島の興奮を反映したかのような熱烈さを含んでおり、その度合いは作品随一とも言える¹²。その後川島は、君江と一晚を過ごしたことを冥途の土産にして命を絶つ。昔のことを思い出したのならば、京子に会いに行く選択肢もないではないし、家族の元へ戻つても何ら不自然ではない。しかし、「耻を晒して歩く位なら」と死に場所を探し求めていた川島は、やり直させようと自身を励ますのではなく、死を後押ししてくれる存在としての君江を求めている。川島が求めたこの君江の姿は、清岡らによって語られた君江像とは、明らかに異なっている。

この場面での君江と川島の性行為は、君江が自分の性的欲求、好奇心を満たすために行っていた他の男性たちとの性行為とは明らかに異質のものである。川島の語りと死によつて、それまで男性を弄ぶ悪女のごとく描かれてきた君江の新しい一面が明かされるのである。

次に君江と対をなす存在である鶴子についての記述を分析していく。

三 鶴子が語る鶴子

自分と進との間柄は今では名ばかりの夫婦で、入籍するの、しないのというような状態ではない。(中略)今のような状況では、自分を正妻にして籍を入れる事をまさか拒みはしまいけれど、さして喜びもしない事は言わずと明である。事によれば却て迷惑そうな顔をしないとも限らない。と思うと、鶴子は老人の好意をかたじけなく思うにつけ、其の好意を受ける事のできない身の上を省みて涙を催さずにはいられなかったのである。(中略)鶴子は殆どあきれ返って、嫉妬の情を起すよりも次第に夫の人格に対して底知れぬ絶望の悲しみを抱くようになった。(本文百三十五頁)

鶴子は女学校に通っていた時から、仏蘭西の老婦人に就いて語学と礼法の個人教授を受け、また国学者某氏に就いて書法と古典の文学を学んだ事もあったので、結局それらの修養と趣味とがかえって禍をなし、没趣味な軍人の家庭にはいたたまれなかった。それと共に自分から夫に忤んだ文学者清岡進の人物に対して永く敬愛の情を捧げている事ができなく

なつたのである。(本文百三十五頁)

あまり名残を惜しむような様子を見せて、無理に引留められても困るし、と云つて、あまり冷淡にして、それがため軽薄無情な女だと思込まれるのは元より好むところではない。(本文百七十三頁)

本分引用の傍線は筆者注。鶴子は、小説内で「作家清岡進先生の御夫人鶴子さま。」と紹介されるなど、夫を支える「シャン」な夫人として認識されており、いわゆる「良妻賢母」型の女性としての評価を与えられている。しかし、不倫の末に清岡の妻となった鶴子は、前夫にとって「良妻」ではない。つまり、鶴子は自らの不倫を語ることで、実際は小説内の世間一般からの評価とは乖離していることを読者に提示している。

鶴子は清岡との婚姻生活を悲観し、「深く絶望」して「自分が為した過の報い」と思い諦めており、義父にのみ思いを打ち明けるが、それ以外の人物には夫との関係を明かさない。鶴子は清岡と正式に籍を入れることを許すという義父の申し出も固辞するなど、清岡との関係を修復できないものとして考えている。また、かつての恩師から洋行の話を持ち掛けられると「とかくの思慮を費す暇もない」と即

座に了承し、自身の「門出の幸あるを喜」んでいる。清岡に洋行の許可を求める際も、「引留められても困る」し、「輕薄無情な女」と思われるのも嫌という態度を取っており、今さら正式に清岡の妻になりたくないという思いが読み取れる。この鶴子の様子からは、意固地で、かつ世間体を気にする自分本位な女性という従来の鶴子評からはかけ離れた人物像が浮かび上がってくる。

また、鶴子は婚姻関係にありながら清岡と不倫する、清岡とは内縁関係が続けつつ、敬愛の念を抱いていないなど、彼女にとつての恋愛感情と性的欲求、肉体関係は結び付くものではない。一見、性に奔放な君江とは正反対の女性として、不幸で貞淑な女性と読解されてきた鶴子も、君江と同じく恋愛感情と肉体関係が結び付かない女性なのである。そのため、鶴子は君江の正反対の女性だけではなく、(多数の男性と関係を持つことはないものの)恋愛感情や肉体関係へのスタンスには、鶴子と君江の共通性が見いだせる。

そして、恩師から持ち掛けられた洋行話に対して「元氣さえ出て来たような心持」になり、思いがけず不幸な生活を脱するチャンスを得た喜びと、この機会を絶対に逃さずに成し遂げようとする執着心、そして未来への希望を抱

く。この場面の鶴子のポジティブな語りは、鶴子が小説前半で語った不幸で諦観的な様子から変わり、このチャンス逃すものかという衝動に突き動かされる鶴子の私欲が滲んでいる。この語りの変化も鶴子登場時から徐々に描写されるわけではなく、洋行話が持ち掛けられた際に一気に変化しており、その性急さからも鶴子の語りが従来のものから一八〇度転換した印象を読者に与える。家族制度のしきたりに囚われ続けてきた鶴子の様子からすれば、清岡や義父の承諾を得ずに了承の返事をするとは考えられない。この洋行話によって、鶴子は語りだけでなく、行動までもが転換している。つまり、鶴子の語りは小説内時間の進行とともに変化していくもの、ということになる。

四 男性たちが語る鶴子

男は大抵乖戾放慢の徒で、女はまづ禽獸と大差なきものと思込んでいる矢先、鶴子の言葉使ひや挙動のしとやかな事がますます不思議に思われ、更にまた、これほど礼節をもわきまえている女がどうして姦通の罪を犯したのであらう、家へ帰った後も頻に心を勞した末、ふと老人は鶴子が操を破ったのはあ

るいは放蕩無頼な倅に欺かれたためではないかといふ気がした。(清岡の父、本文百三十三頁)

抑々清岡には最初から鶴子を正妻に迎えるほどの堅い決心があつたわけではない。唯折々人目を忍んで逢瀬をたのしむくらいに留めて置くつもりであつたが、女の方が非常にまじめで、事件が案外重大になつてしまつた(中略)

其の後清岡は月日の立つにつれて自分の品行の修らないところから、何となく面伏な気がして、冗談一ツ言うにも気をつけねばならぬような心持がして窮屈でならなくなつた。それがため、一日に一度はどうしてもカッフェーか待合に行つて女給か芸者を相手に下らない事を言いながら酒を飲まなければ心寂しくてならないような習慣になつた。(清岡、本文九〇頁)

「実にさびしい出発でしたな。」と村岡は既に人影のなくなつたプラットフォームを見廻しながら初めて歩み出した。

「彼の女の生活もこれで一篇の終を告げたのだ。」と進は吸いかけの巻煙草を線路の方へ投捨てた。

(村岡・清岡、本文百七十四頁)

引用の小カッコ内に誰からの語りであるか補足した。男性たちの視点から身体肉感がありありと描かれる君江に對して、鶴子はそれが殆ど見られない。鶴子の容姿への描写は、本文六十三頁より「年の頃は三十近い奥様らしい品のいい婦人」で、「白い肩掛を引掛けた丈のすらりとした瘦立の姿は、頸の長い目鼻立の鮮な色白の細面と相俟つて、いかにも淋し気に沈着いた様子」だと語られるが、この視点は小説内の人物ではなく、菅原克也の「語り論」で言うところの「物語の作中人物とはならない語り手」のものである。この語りの視点は、小説内の誰の視点も含んでおらず、ある意味で一番公平に鶴子を評価しうるものだと考えられる。このことから、鶴子は小説内の世間一般から「品のいい奥様」と認識されていると言える。

しかし、鶴子を三人称で評価する語りはこの場面のみであり、小説内の人物たちから鶴子へ向けられた語り自体が君江よりも圧倒的に少数であることは着目すべき点である。君江は小説内人物の語りによって、性に奔放な女性という実態が暴かれたが、そもそも鶴子に向けられた語り自体が非常に少なく、読者は鶴子本人の語りによって、初めて周囲からの鶴子像と実態の乖離に気づく。そして、それも読者以外には明かされず、清岡はじめ小説内の人物は鶴

子が小説内から退場しても、なお知らないままである。小説内の男性たちは、君江の実態を知る機会が定期的に与えられているが、鶴子の実態を知る機会是谁一人として与えられておらず、それぞれの実態の暴かれ方という点では、君江と鶴子は真逆である。

小説内の人物たちの鶴子への語りは本文を引用した三場面のみである。そして、小説内で鶴子へ下される評価は常に「礼節」をわきまえた「良妻」としての鶴子を想定しているものだと言取れる。つまり、語る側の男性たちは、「気苦労の絶えない不幸な婦人」という前提の下で鶴子を語るのだ。しかし、鶴子は第三章でも述べたように、もはや清岡との結婚など望んでおらず、事実上の離縁をする時自分だけが損をしないように世間体を考慮するなど、計算高く自分本位の面も併せ持つ女性である。この鶴子が自ら語った鶴子像と、周囲の人々によって語られた鶴子像の間には大きな隔たりが認められる。これは君江にも同じである。君江は性の奔放さを、まさか自ら明らかにほしくないが、隠そうとはしない。さらに君江には「人から怨を受ける」ような自覚はないが、実際には複数の男性から「怨」を買っており、自己評価と小説内の男性たちから下される評価（語り）とはかけ離れている。従って、「小説内におけ

る他人からの評価と自己評価の乖離」という点でも、君江と鶴子は同一となる。

五 君江と鶴子と語り

これまで見てきたように、君江と鶴子はそれぞれ自ら「語る」側となる語り、そして他人から「語られる側」となる語りの二つの側面が描かれる。従来の先行研究では、鶴子は性に奔放な君江と対をなす女性とされることが殆どであり、鶴子はおまけに過ぎない、といった鶴子評さえ見られた。しかし、君江と鶴子は全く正反対の女性というわけではない。

まず、君江は自身が語るよりも男性たちから語られることが圧倒的に多く、また君江を語る人物は、過去現在問わず君江の客の男性たちが殆どである。カッフェーの客以外で君江を語るのは、村岡のみである。これは君江が女給であることも考慮しなければならないが、語られる機会が多い君江は、好意的に語られることもあれば、否定的に語られることも多い。つまり、君江は小説の中で、語りとしてプラスからマイナスまで様々な評価を受け取っており、君江に対する語りは、そのまま語り手と君江の関係性を反映

している。そのため、小説内の男性たちを、君江をどのようにに語るか、という点において、それぞれの言動のみから区分すると

- (a) 好意的…川島、松崎、村岡、矢田
- (b) 否定的…清岡、円タクの運転手
- (c) 好意的か否定的か不明…木村

以上の三グループに区切ることができる。この中で村岡だけは君江の客でないが、他は全員が君江の客である。(a)の好意的な語りをした人物たちの中でも、第一章で述べた「君江の心情の中に入ることを許された」川島と松崎、拒まれた村岡と矢田に再区分できる。これに対して、(b)の否定的な語りをした清岡と円タクの運転手は、どちらも「君江の心情の中に入る」ことを拒まれている。さらに、(c)の好意的か否定的か不明である人物グループの木村は、「心情の中に入ることを許された」男性である。このように、君江は自身を好意的に語る人物全員に興味を抱くわけではない。

例えば、矢田からの語りは非常に好意的だが、君江は彼に興味を抱かず、「気障な奴」だと語る程度である。君江は興味を抱かないという態度を通して、矢田へ否定的な眼差しを向けている。また、清岡は君江の裏切りを知ってもな

お、パトロンになろうとするなど執着が強い。この清岡の行動は、君江が女給を辞めさえすれば、彼女を再び専有できるはずだ、と思い込んでいるように見える。他の男性には彼女を否定的に語る清岡だが、君江に対する行動からは、その視線は否定的ではないことが分かる。対して、君江は清岡の恋人だと誇る様子もなく、他の男性たちと関係を持ち続け、清岡を特別扱いしない君江からは、清岡への否定的なニュアンスが伺える。一方で、木村は、晩飯や自動車の代金を君江に支払わせ、ノルマのチケットを売りつける等、ヒモ男である。その語りや行動は君江に対し、決して好意的ではない。むしろ君江に対して冷淡な印象を読者に与えており、他の人物たちの語りと比較すると、そもそも君江を語るほどの「想い」が見えてこない。いずれの男性も君江を様々に語るものの、その語り口はどこか無責任で「噂」の範疇を超えないかのである。

つまり、君江を好意的に語る男性たちは、必ずしも君江から興味を抱かれ、好意的に語られるわけではない。また、君江が興味を持つ男性でも、君江に興味のない男性も存在する。そのため、君江に対する客の男性たちからの語りとして、君江から男性たちへ向けた語りは、釣り合わないことも多く、相手への一方通行の語りである。無論、君江を好意的

に語り、君江からも好意的に語られる人物も存在するが、小説内では川島と松崎の二名のみであり、非常に少ない。また、男性たちの君江への否定的な語りと君江自身の語りとの間で生じる齟齬によって君江の実態、二重性が暴かれていくことは興味深い。

一方で鶴子は、登場回数は少ないものの、その割合は語られるよりも、自ら語る描写が多数を占めている。ここでも男性たちを、鶴子をどのように語るかという観点で区分すると、

- (d) 好意的…清岡の父、村岡、(小説内における世間一般)
- (e) 否定的…清岡
- (f) 好意的な否定的か不明…不在

となる。鶴子への語りは少ないため右記の区分となったが、好意的に評価している人物のほうが多い。また、男性ではないため含んでいないが、君江も鶴子に対して「シャーンねえ」と好意的に語る。かつ、男性たちから鶴子への語りは、貞淑な妻、清岡に騙された不幸な女性など、いわゆる良妻として賛美するものばかりである。語られる回数が少ないことは考慮する必要があるが、鶴子への語りは好意的なものばかりであり、この点は君江と大きく異なる。また、男性たちの語りによって構成される鶴子の「良妻賢母」

的なイメージは小説内を通して一貫しており、洋行によって小説から退場するまで変化しない。夫である清岡も鶴子への眼差しが変化しないという点では同様だ。しかし、男性たちの語り(評価)から構成される。鶴子のイメージは、鶴子自身の語りによって覆される。鶴子は小説内の男性たちから画一的に「良妻」の評価を得ているが、これと同じく君江も典型的な女給として、複数の男性を手玉に取る「悪女」のように語られている。つまり、君江は「悪女」として、鶴子は「良妻」として、それぞれ評価を下す男性との関係を問わず、同一に語られている。君江には川島からの語りという例外が存在するが、『つゆのあとさき』内の男性たちが語る君江像、鶴子像は常に一定であり、そこには「君江は女給として悪女でいてほしい」、「鶴子は貞淑な良妻でいてほしい」という男性たちの願望や妄想が含まれているのだ。

なお、「つゆのあとさき」内において、女性によってなされる語りでは、君江も鶴子も好意的にのみ語られていることは注目する必要がある。君江は女給の同僚たちから、鶴子は君江から好意的に語られる。二人が他の女性たちから否定的に語られることはなく、読者が彼女たちの二面性を知るには、男性たちの語りが必要不可欠である。この両性

の「語り」の差異も、「つゆのあとさき」を巡る語りにおいて非常に興味深いものである。

まとめ

筆者は序論において宮城達郎や奥野信太郎に代表される「永井荷風は女性に対して侮蔑的な作家であった」という先行研究の通説に触れたが、考察の結果、主に二つの理由からこの通説は適当ではないと判断するに至った。

宮城が「フェミニスト作家」だとした谷崎潤一郎と対照的だから荷風が「女性侮蔑作家」という論が飛躍していることは言うまでもないが、奥野の「娼婦が一種の氣安さを感じさせてくれる」存在だったから荷風は娼婦とのみ関係を持ったという説にも疑問が残る。

第一に、『つゆのあとさき』において「娼婦」である君江は、同時期に複数の男性と肉体関係を持つなど、「氣安さ」を感じさせる女性ではない。むしろ流行作家で父親が高名な学者という点において荷風と通ずるところが認められる清岡が、パトロンになってまでも縋りついている様子は、君江から「氣安さ」を感じている、とは到底考えられない。また、君江を「侮蔑的」に描かれているとするならば、

川島の語りは不要なものであろう。死に場所を探し求めている川島を死へ導く君江は、それまで描かれた「魔力」を持つ女性ではなくなっている。さらに君江は、他の女給たちとは異なり、金銭的に困窮して女給をしているわけではない。客たちから貢物に執着せず、男性と一对一の関係になることも望まない。小野祥子が指摘したように、荷風作品の〈型〉からは逸脱した存在として登場した君江をただ単純に「侮蔑的」な女給として語ることはできない。

第二に、「良妻」で不幸かつ諦観的な女性として読解されてきた鶴子が自分本位な女性であることを発見したためである。夫を軽蔑しているものの、夫との別れでは「輕薄無情」だとは思われたくない、など世間体を気にする鶴子の様子は「良妻」ではない。また、不倫した自分が悪いから不幸な人生を強いられても仕方ない、と諦めていた鶴子が、洋行という現在の生活を脱するチャンスを与えられると決して逃さない様子は、まるで「自分だけが悪いのではない」と言わんばかりである。このように「良妻」としてのみ描かれたわけではない鶴子からも「荷風は女性に対して侮蔑的」とは考えられないのである。

小説内の女性たちを巡る語りの諸相では、君江、鶴子とも自分本位な女性であることを自ら語る。しかし、語る側

から語られる側に回ると、君江は語り手の男性との関係によつてその評価（語り）が多様であり、鶴子は語りから成されるイメージとその実像が乖離したものとなる。相手の男性との関係によつて様々に語られる君江は、それぞれ男性から語られる姿たちの祖語によつて、「悪女」として語られる自らの評価を僅かではあるが覆している。また、鶴子は男性たちから成される「良妻」という画一的な語りの中から自らの語りで脱却していく。鶴子の二人を読み解く上で、両者ともに男性からの「語られ方」が非常に重要となるのである。これらの発見から、両者の「語り方」と「語られ方」に着目すること、

(a) 男性からの語りのみで二重性が他者から暴かれる君江

(b) 「自らの語り」と男性から語りの双方によつて二重性を自ら提示する鶴子

という相違を発見するに至った。次から次へと男性と関係を持つ君江と、過去の不倫から自身を厳しく律する鶴子の性に対する意識は対照性が強いが、実際には君江も鶴子も肉体関係と恋愛感情は結びついていない点、自分本位な点では二人は類似した女性となる。この発見は、従来の研究では君江と正反対の女性としての役割に過ぎないとされて

きた鶴子をめぐる研究を発展させるものとなるだろう。

以上の読解を通じて、荷風は娼婦を安易に扱っていたわけでも、娼婦以外の女性も不幸なだけの女性としたわけでもないことが明らかになった。作品内での君江と鶴子の「語り方」と男性たちから向けられた「語られ方」は、君江と鶴子の二重性を形作り、またそれを詳らかにする装置として作用している。これによつて荷風の描く女性たちの奥深さを一層象徴するとともに、女性たちが「侮蔑的」に描かれてきたわけではないことを示しているのである。

今回は「語られ方」との齟齬や矛盾を明らかにするため、君江と鶴子の女性二名の語りに焦点を当てて分析を行った。男性たちの語りについては、君江と鶴子に向けられたもののみを取り上げたが、女性の語りから浮かび上がる男性たちについての読解、考察が不十分であることは残された課題である。また、君江と鶴子の語られ方から『つゆのあとさき』においては、「永井荷風は女性侮蔑作家ではない」としたが、他の荷風作品でも同様のことが言えるのか、引き続き検討したい。

【注】

本稿の底本はすべて永井壯吉『荷風全集』（岩波書店、一九九四年）による。

- 1 谷崎潤一郎「つゆのあとさき」を読む『改造』第十三卷二号 改造社 一九三一年十一月）
- 2 椎名健人「作家間の師弟関係と承認の機能——永井荷風「谷崎潤一郎氏の作品」を手がかりに——」（『教育・社会・文化』研究紀要』第十八卷 京都大学大学院教育学研究科 二〇一七年）
- 3 宮城達郎『耽美派研究論考』永井荷風を中心として（桜楓社 一九七一年）
- 4 奥野信太郎「永井荷風における好色趣味」（『文藝』第十三卷十七号 河出書房 一九五六年十月）
- 5 中村真一郎「解説」（永井荷風「つゆのあとさき」岩波書店 一九八七年）
- 6 小野祥子「荷風の〈女〉はどう読まれてきたか——「荷風と女性」をめぐる評価史」（『国文学 解釈と鑑賞』第六十七卷十二号 至文堂 二〇〇二年十二月）
- 7 菅聡子「ヒモと〈女〉と——荷風小説の夢のあと」（『文学』第十卷二号 岩波書店 二〇〇九年三月）
- 8 多田蔵人「永井荷風「つゆのあとさき」論」（『国語と国文学』第八十八卷十二号 至文堂 二〇一一年十二月）
- 9 戸松泉「女たちの風景——「つゆのあとさき」素描」（拓殖光彦編集『永井荷風仮面と実像』至文堂 二〇〇九年）

- 10 草間八十雄『近代婦人問題名著選集続編 第九卷 女給と売笑婦』日本図書センター 一九八二年十月
- 11 マルセル・モース『贈与論』岩波書店 二〇一四年
- 12 先行研究の中には、君江は女神として昇華されている、としているものも存在した。

【主要参考文献】

- ・菅原克也『小説のしくみ 近代文学の「語り」と物語分析』東京大学出版会 二〇一七年
- ・関礼子『女性表象の近代文学・記憶・視覚像』翰林書房 二〇一一年
- ・國文學編集部『明治・大正・昭和 風俗文化誌』學燈社 二〇〇七年
- ・増田裕美子、佐伯順子編集『日本文学の「女性性」』思文閣出版 二〇一一年
- ・佐伯順子『愛と「性」の文化史』角川学芸出版 二〇〇八年
- ・鈴木文孝『永井荷風の批判的審美主義 特に艶情小説を巡って』以文社 二〇一〇年
- ・馬場伸彦『「カフェ」と「女給」のモダニズム試論』『淑徳国文』第三十九号 愛知淑徳短期大学 一九九八年三月
- ・『大衆文化辞典』弘文堂 一九九二年
- ・大林宗嗣『女給生活の新研究』巖松堂書店 一九三二年
- ・小谷野敦『日本売春史』新潮社 二〇〇七年三月

・大林宗嗣『女給生活の新研究、
大阪市に於けるカフェー女給調査』
巖松堂書店 一九三二年一月

(立教大学文学部四年)